

「クリエイターの話 ～ 私のイメージの源泉」

スペースデザイン部会員 二井 進

『空間表現について』

空間表現を行う上で、表現する作品の存在する形、場所、位置関係を大切に作品相互の組み合わせなどを通しての空間構成表現を行ってきました。主に曲面、曲線の構成による視線の動き、場（台部）と上部に乗る形の空間の関係性を探り出そうとして模索してきました。

表現手段としては、樹脂という素材の性質を利用し、切削、金属粉（ブロンズ粉、アルミ粉、真鍮粉・・・）との混合材料、シルクスクリーン印刷との応用など他素材との組み合わせによる表現への試みを行ってきました。

「創造、制作する行為はコラージュと同じことだと思う」

会員であった小野かおる氏に教えられたことがある。小説でも、詩でも、美術作品においても伝承されてきた事柄、経験した事柄、見てきた事柄、聞いてきた事柄、学んできたことなどを通し、それらの中から言葉、形式、様式など取捨選択しながら「かたち」を組み立てて構成していくことが出来る、と。

作品を制作していく中でスケッチをくり返し、組み合わせる行為を繰り返しながら平面表現していくように、空間表現を行う段階において、これまでの作品の分割及び部分、未使用部分、などを積み木（スケッチ）と考えて再構成し、組み立てていくこともしています。そうすることで、イメージの組み立てや遠近感、バランス、運動の流れ、コントラスト、調和など空間性を考え、またテーマ設定も確かなものにしていくことがあります。

今回は4つに分類して考えてみました

- ① 平面表現を立体表現に
- ② 「間」の問題
- ③ 「場」の環境
- ④ 「光と影」を意識

① 平面技法を立体表現に

シルクスクリーン印刷という平面表現を立体表現にどのように持ち込んで表現していくか、色彩を入れることにより表現の幅を広げていくことが出来ないかを試行錯誤していました。金属板、アクリル板、ガラス板、転写技法を用いながら作品の中に取り入れるということを行ってきました。

一例として、

1986年「囁木」の作品においては半透明なアクリル板に印刷した図柄を作品に接着したものです。

1992年「写影」では転写技法を用いたものです。インクは透明樹脂に着色剤を混ぜたものです。

色と抽象形状とが場の部分と形状部分に組み合わせることでより作品テーマを表すことを目指して制作していました。



◀ 1986年 「囁木」 Whisper



1992年 「写影」 The Shadow that was Photographed ▶

②「間」の問題

また、場のどこに位置付けるかということも空間表現では大事なことと思っています。作品を見せるのではなく、空間を見せていく、「間」をどう取り入れていくかを大切にしています。「間」によって作り出される何もない空間。その「間」をすることで感じることでできるストーリー、余韻、が表現の要因として大いに大事なものであると思っています。移動する視線でもって見て行くことが出来る。この視線の移動と視界を拡大・縮小させる目の動きは空間を捉えイメージを生み出していくことのできる大切な要素だと思っています。

2008年「語り人」では語り部として戦争などの記憶を伝えていく人たちを表現した作品です。前空間のアキ(未来)と立像(現在)、後空間(これまでの出来事)と3つの空間を意識しています。



2014年 「乱舞」 Dance Wildly

一つの形が動き回り群れていく姿(移行していくかたち)

未来(前空間)↓

現在(立像)↓

過去(後空間)↓



2008年 「語り人」 Human Hands Down

戦争・災害など出来事を語り継ぐ人々(台部は群像写真一印刷)

③「場」の環境

鏡面を作品内に取り込むことで周囲の景観との作用と効果について。

見る側の視点の移動により鏡面上で変化していく周囲画像の反射と上部作品との関係性を試していました。色彩の強いもの、色彩の和やかな物、天井の間接照明などと上部作品との関係性などを通して表情が変化していく様子は意図していない不思議な表現効果となり、他の表象された物を作品内に取り込むことでの面白さを感じました。

2015年「回帰」は国立新美術館、2018年「混沌」は神戸原田の森ギャラリーの天井照明の反射によるものです。



2015年 「回帰」 The World is Repeat



2018年 「混沌」 Chaos

④「光と影」を意識

近年の作品はモノトーンによる表現を試みています。光と影の面白さを表現できたらと思っています。光の位置によってできる陰影の動きの面白さは墨絵のような淡い墨から濃い墨へと空間を表現しているように、光と影が作り出す濃淡の移り変わりは面白いものを感じています。白い作品の中の面の動きによって、緩やかに変化していく面部分、面と面が切替わる稜線部分の陰影のエッジの強さ、谷部分の影の溜まりが絡み合い空間の面白さを感じています。同じ作品を同じ位置から見ても午前と午後の光の動きを追ってみていると光と影によって現れる表情が変化し、見えてくる空間性の違いを多々感じることがあります。



2019年 「流景」 Bygone Scene



2023年 「雨滴」 Drop of the Rain

<二井進 プロフィール>



1979年東京造形大学を卒業後、美術団体「新制作協会展」(現在は新制作展)に、作品題名「出来事」(occurrence)を初出品。

1981年、1987年、1990年に新作家賞を受賞、1993年会員推挙となり、以後毎年新作を発表している。

他、個展、グループ展等の発表も行っている。

作品は空間造形作品を主に平面表現による制作も行っている。

主題のテーマとして生まれ育った被爆地ヒロシマの歴史にも由来し、作品も「場」の記憶として ヒト(人)・コト(事項)・サマ(様子)・トキ(時) を表現してきた。